
皇帝ティートの慈悲

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皇帝テイトの慈悲

【Nコード】

N7508I

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

愛するヴィツテリアへの愛の為に皇帝であり親友でもあるテイトを殺そうと決意するセスト。それを知ったテイトは彼をどうするのか。モーツァルト最晩年の作品を小説にしました。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

皇帝ティートの慈悲

第一幕 複雑な思惑

ローマ帝国は決して一つの思惑でのみ成り立っていた国家ではない。その中には絶えず様々な思惑が存在しせめぎ合ってきていた。それはティート帝の時代も同じであった。

豪華な大理石の宮殿にその美女はいた。白い見事な服に身を包んだ黒髪の美女だ。目は黒く髪と共にその気性の強さを示しているようであった。

顔つきも確かに整っているがその美貌はヘカテの美貌と言うべきか。険のある美貌だった。その美貌で今細い繊細な顔立ちをした若者と対していたのであった。

「ではセストよ」

彼女はまずその若者の名を呼んだ。セストと呼ばれた若者は頼りない顔をしてそこに立っている。顔立ちはいいがやはり繊細で中性的な印象を与えるものだ。黄金色の服と青いマントは立派であるがそれに着られているという印象は拭えない。茶色の癖のある鳥の巣を思わせる髪もまたその印象を強くさせることを助長させていた。

「貴方はまたあのことを仰るのですね」

「いけませんか」

セストは頼りない顔で彼女に言葉を返した。

「それは」

「レントウーロを私達の側に引き込み」

「はい」

まずはこう話される。

「そしてカンピドーリオに火を放ちそれに乗じて乱を起こすと」

「その通りです」

セストは美女にまた答えた。

「いけませんか」

「何度も聞きました」

美女はまずはその腹立たしさを隠そうともしなかった。

「それこそ幾度もですよ」

「ですが」

「陛下が私の目の前でベレニーチエに対して分別を失い」

そのことを考えるだけで忌まわしいようであった。その目の光がさらに剣呑なものになってきているのがその何よりの証拠であった。

「その為に私は私自身に相応しい場所を失うなどは」

「ですがヴィツテリアよ」

セストはここではじめて彼女の名を呼んだ。

「何ですか？」

「よくお考え下さい。陛下ですよ」

「それが何か」

ヴィツテリアは剣呑な目を彼にも向けてきた。

「ありますか？」

「陛下を危めるなどと。それは決して」

「では言いませんよ」

ヴィツテリアは己を咎めてきたセストに対してその傲然とした態度で以って応えてきた。それはまさに復讐の女神のそれであった。

「その偉大な慈悲深い英雄が」

「はい」

「英雄の父が私の父から皇帝の座を奪ったのですよ。そして私を欺き惑わし」

「それは」

「違うというのですか？」

反論を許さない問い掛けであった。

「それは」

「いえ、それは」

「その通りですね。さらに」

セストの反論を封じたうえで言葉を続けるのだった。

「この気高いローマの七つの丘に忌まわしいベレニーチエを呼び戻す。国を追われた異邦の女をです」

「皇女様」

セストはここでは彼女をあえてこう呼んだ。その荒らぶる気持ちを抑えさせる為であろうか。

「貴女様は嫉妬しておられる」

「私が？」

「如何にも」

何とか毅然とした態度を崩さずに出した言葉であった。彼とても必死であった。

「ですからそれを抑えられて」

「では質問を変えましょう」

多少の忌々しさを抑えつつここでは話を変えてきた。

「セストよ」

「何でしょうか」

「またもや彼の名を呼びそれに応えさせた。」

「貴方は私を手に入れるつもりはないのですね」

「それは……」

「答えなさい」

戸惑いは許さなかった。答えることを強要する言葉だった。

「どう思っているのですか」

「それは」

「答えるのです」

やはり質問を変えない。あくまで答えさせるつもりだった。そしてセストはそれに抗することはできなかった。苦しい顔で俯きつつ述べたのだった。

第一幕その二

「私は貴女様を信じます」

「それが答えなのですね」

「その通りです」

今それを自分でも認めたセストであった。

「ですから何なりとお命じ下さい。お決め下さい」

「何なりとですね」

「その通りです。貴女様は私の運命です」

こうまで言うセストだった。

「私は貴女様の為でしたら何でもしましょう」

「言いましたね」

「はい」

今それもはっきり認めたのだった。

「はっきりと今」

「わかりました。それでは私も言しましょう」

ヴィツテリアもまたそれを受けて言うのだった。そこには皇族たるに相応しい傲岸さがあつた。気品よりもそれが勝っていたのだった。

「私は太陽が沈む前に」

「この太陽が沈む前に」

「そうです」

まずはそれを言い切ってみせた。

「あの恥ずべき男が消えることを望んでいます」

「そうですか」

「先程も言いました」

これは彼女にとっては絶対の真実だった。

「あの男は篡奪者」

「篡奪者………」

「本来ならこの偉大なローマは私のもの」

これが真実であるのだ。あくまで彼女にとっては。

「それを取り返すことこそが望みです」

「では私は」

「行きなさい」

冷然とした態度で言葉を告げた。

「今すぐに」

「わかりました。ですが」

「まだ何かあるのですか？」

「御願いがあります」

顔をあげてじっとヴィツテリアを見ての言葉だった。

「私から。せめて」

「せめて？」

「その甘い眼差しをお与え下さい」

切実な顔になって言った言葉だった。

「せめて。それだけでも」

「それは」

「御願いです」

躊躇いを見せたヴィツテリアに対してさらに懇願した。

「一度だけでも。どうか」

「私は」

ここでヴィツテリアは思うのだった。己の中にあるその傲岸さと冷然さ、そして恨みの深さを。それを感じるとやはりよいものは感じないのだった。

（間違っている）

このことは自覚していたのだった。その自覚が今セストから顔を背けさせた。

（セストを利用して。こんなことをするのは）

（私は愚かだ）

そしてセストもこう思っていたのだった。彼は俯いてそれを思う

のだった。

（陛下を害するなぞ。そんなことは）

（陛下に怨みはない筈）

（あの様な素晴らしい方を）

それぞれテイートという皇帝についてはよく知っていたのだ。彼等にとつて彼は親友でもあるのだ。それだけかけがえのない存在に對して害意を抱いている自分達に對して嫌悪という感情を抱かずにはいられなかつたのである。

（害するなぞと）

（私は何と罪深い）

そう考えている時だった。今度は部屋に赤い髪をした長身の若者がやつて来た。銀色の服に赤いマント、精悍な顔立ちはセストとは正反対であった。

「セスト、ここにいたか」

「アンニオ」

まずは二人はお互いの顔を見てその名を言い合つたのだった。

「急いでくれ。陛下がお呼びだ」

「陛下がか」

「そうだ。行こう」

「う、うん」

「行くのです、セストよ」

ヴィツテリアはこれまで想っていた感情を消し去つてセストに告げた。

「陛下はベレニーチェとばかり御会いですから拜謁できる時は貴重ですよ」

「ヴィツテリア様」

アンニオは今のヴィツテリアの言葉にははつきりと不快を覚えたようであった。その精悍な顔にその色をあからさまに見せてきていた。

「貴女様は陛下を誤解しておられます」

「そつでしよつか」

「陛下はお優しいお方」

彼はまずはこう言った。これはヴィツテリア達と同じ評価だった。

第一幕その三

「そして我等の英雄ではないですか。この偉大なるローマを統べておられる」

「まあそうですね」

「それにです」

彼はさらに言葉を付け加えてきた。

「それに？」

「ベレニ―チエ様は今ローマにはおられません」

「ローマにはいない」

「そうですね」

アンニオはこのことをヴィツテリアにはっきりとした言葉で伝えたのであった。ヴィツテリア自身もそれを聞いて目を動かさずにはいられなかった。

「あの方の御命令でローマを発たれました」

「まさか。それは」

「本当です」

答えるアンニオの言葉の強さがそれが真実だと教えていた。

「今ローマはそのことで泣いています」

「貴方はそれを見ていたのですね」

「その通りです」

またしてもはっきりとした声で答えてみせるアンニオであった。

「私はあの方がローマを去られる崇高な別離の場所にいましたので」

（希望が）

ヴィツテリアの心に光が差し込んだ。

（これなら私も）

「セスト」

そしてすぐにセストに囁くのだった。

「何でしょうか」

「すぐにことを中止するのです」

こうセストに囁いていた。

「よいですね」

「止めるのですか」

「今はその時ではありません」

今のアン二オの言葉を聞いての判断であるのは言うまでもない。

ここでは彼女は政治的な判断を下したと言える。

「ですから。よいですね」

「私は貴女様の命じられるままに」

「ならばそうするのです」

これで決めさせたのであった。

「よいですね」

「わかりました。ですが」

「何ですか？」

「私は貴女様の視線が欲しい」

思い詰めた顔での言葉だった。

「せめて。その優しい視線が」

「それが何か」

「せめてです」

言葉が切実なものになっていた。

「それだけでも。どうしてこの様な苦痛を」

「そこまで言うのなら」

ヴィツテリアはセストのその言葉を受けて彼女が持っている生ま

れながらの傲然さを露わにして声を出すのであった。その声は。

「私の気に入られないのなら貴方のその疑念を捨てるのです」

「私の疑念を」

「そう。そして私を悩ませないこと」

セストにとつてはあまりにも残酷な言葉であった。だがヴィツテ

リアはそれを承知のうえで言葉を出していた。目は完全にセストを

見下ろしていた。

「この様な煩わしい疑いでただひたすら信じる者は真心を約束され
ます」

「真心を」

「そう。そして常に欺かれることを怖れる者は背信を誘い込むでし
よう」

このことを傲然と言い放ち終わるとその場を去った。後にはセス
トとアンニオが残った。アンニオは打ちひしがれるセストに優しく
声をかけるのだった。

「なあセスト」

「何だい？アンニオ」

「行こう、今から」

「行くと言っても何処に行くんだい？」

「僕を幸せにする為だよ」

彼は微笑んでセストに告げた。

「その為だね」

「君を幸せにする為に」

「そう。君は僕の愛にセルヴィリアを約束してくれた」

このことを今彼に述べた。

「もうそれで充分だ。このことを君が陛下に願い出てくれればもう」

「アンニオ」

セストはここでそのアンニオに思い詰めた声をかけた。

第一幕その四

「何だい、友よ」

「君の友情は忘れない。だからこそ僕は」

「来てくれるんだね」

「喜んで」

彼に対してはその真摯な友情を見せるのだった。

「だから行こう。今から」

「うん、いつも共に二人で」

それを言い合いつつ部屋を後にしたのだった。

カンピドーリオの神殿。厳かなその神殿の階段の前に多くの民衆が集まっていた。神殿の上には元老院の議員達や属州の総督達、將軍達が並んでいる。彼等が誰を待っているのかは最早言うまでもなかった。

「ローマを守護する偉大なる神々よ」

民衆達は神殿を見上げて高らかに言う。

「我等が皇帝ティートに正義と力を与え給え」

「そして我等の世に名誉を」

その声が終わると神殿から厳かかつ豪華な紫の衣と緋色のマントを羽織った男が姿を現わした。髪の毛は前後で短く切り顔は彫が深く男らしい眉に目を持っている。だがその目は実に優しげで穏やかな光を放っていた。多くの将校を従える彼こそローマ皇帝ティートその人であった。彼は今元老院の議員達や將軍達を左右に置き民衆の前に姿を現わしたのであった。

「陛下」

そのうちの一人が彼に一礼してから声をかけた。

「我々元老院は貴方様を祖国の父と任命します」

「私を祖国の父にか」

「はい、そうです」

そのことをあらためて彼に告げた。

「元老院がことを決めるようになってこれ以上に正義に適ったこと
はないでしょう」

「確かに」

「その通りです」

他の議員達もそれに続くのだった。

「この神殿もまた貴方のものに」

「そして申し上げます」

彼等はさらにティートを崇めて言つたのだった。

「ローマの全てが貴方を御護りすることを」

「今ここに」

「陛下」

また議員が一人前に出て来た。議長であるブブリオだ。厳格そくな顔をした老人だった。

「ブブリオか」

「さあ是非我等の想いをお受け下さい」

「受けてよいのだな」

「是非」

このことをあらためて告げる。

「お受け取り下さい」

「では言おう」

その言葉を聞いてからティートは民衆に顔を向けた。そうして厳かな様子で告げるのであった。

「ローマの市民達よ、今ヴェースヴィオの山が焼け付く流れを吹き
出している」

「何っ、あの山がか」

「何と恐ろしい」

ローマの市民達も議員達もそれを聞いて大いに驚いた。

「辺りの畑を町々を焼き尽くし」

「地獄か」

「逃げ延びた者は家をなくし餓えに怯えている。今諸君等の力をそれに使いたいのだ」

「我々の力を」

「そう。だからだ」

ティートはさらに言う。

「諸君等の私への愛情をそれに使わせて頂けないだろうか」

「何と、何と素晴らしい御心」

「まさに偉大なるローマの主」

この言葉こそ彼等を最も感動させるものであった。

「これこそ真の英雄」

「素晴らしき皇帝」

「では諸君」

ここまで告げたうえで皆にさらに伝えた。

「今からそれに力を尽くしてくれ。いいな」

「はっ、それでは」

「今より」

皆それを受けてそれぞれの仕事場に戻る。今ティートの言葉が彼等を打ったのだった。その結果に他ならなかった。

「セスト、アンニオ」

「はっ」

「陛下、何でしょうか」

二人はティートの言葉に従い彼の元に跪いた。ティートはあらためて彼を見る。

第一幕その五

「今ここに残っているのは我等のみ」

「はい、それは」

「確かに」

神殿の前には誰もいない。彼はそれも考えて皆を行かせたのであった。ティートの顔からはそれまでの厳かさは消え温厚な顔になっていた。

「セスト」

アンニオはその中でセストにそつと囁いた。

「何だい？」

「今いるのは僕達だけだ」

彼はそのことを言うのだった。

「だから話してくれないか」

「それは」

「二人共聞いて欲しい」

セストがアンニオに何か言う前にティートが二人に対して言ってきた。

「！？何か」

「何でしょうか、陛下」

「辛かった」

嘆息しつつの言葉であった。

「彼女が去ったことは私にとっては非常に辛かった」

「彼女ですか」

「そう、ベレニーチエ」

その名が出た。

「別れは辛いものだった。しかし」

「しかし」

「彼女は私の妻になりたい。そしてローマの者達もそれを望んでい

る

「彼女がですか」

「そう、彼女だ」

その彼女が誰かはもう言うまでもなかった。少なくとも二人は思ったのだった。

「では私は選ばう。彼女を。皇帝は愛よりも国を選らばなければならぬから」

「それは」

「いや、その通りだ」

慰めようとしたアンニオの言葉を退けた。

「だが友情は選びたい。だから」

「だから」

「セスト」

ここで何故かティートは彼の名を呼ぶのだった。

「君の妹を」

「セルヴィリアを」

「そうだ。彼女を私の妻に」

「何と……」

今度はアンニオが打ちひしがれてしまった。今この瞬間に彼は絶望に陥った。

「何という恐ろしい運命なのだ」

「どう思うか」

「それは」

「セスト」

また彼の名を呼んで問う。

「これについては。どう思うんだい？」

「陛下」

彼に代わってアンニオが答えに出た。何とかその沈痛な心を隠して。

「私にはわかります。それは」

「それは」

「帝国の為には非常によい決断です」

己を押し殺しての言葉であった。何とか。

「私はその御考えを何処までも護りましょう」

「アンニオ、それは」

「セスト」

彼を気遣うセストだったが彼はそれを言わせなかった。

「彼女はまさにローマを護るに相応しい。だからこそ」

「いいというのだね」

「その通りです」

あらためてティートに答えてみせた。

「ですから是非共」

「わかった。それではだ」

ティートは彼の言葉を受けて満足した顔で頷いた。しかしその心は見えてはいなかった。

「彼女に伝えてくれ」

「はい」

沈痛さを押し殺した顔で頷くアンニオだった。

「アンニオ、そなたが」

「わかりました」

「そしてセストよ」

「ええ」

今度はセストに声をかけた。彼は無表情でそれを受けた。

「君は今私と一緒にいてくれ」

「陛下と共にですか」

「君は私の無二の親友」

少なくとも彼はそう信じていたし事実であった。だが今その親友の心が揺れ動いていることもまた知らなかったのであった。

「だからこれからも私と共に」

「陛下、御言葉ですが」

先程のヴェITTERIAとの話を思い出しそれを胸にしての言葉だった。

第一幕その六

「私はそこまでの者ではありませんせぬ」

「謙遜なのか？」

「いえ、違います」

それは否定した。

「私はそれを受ける資格がないのです」

「そんなことはない」

彼はすぐにそれを否定した。

「君こそは私の」

「ですが陛下」

「いや、言おう」

しかし彼はあえて言うのであつた。その誇りと共に語りだした。

「この帝位には何があるか？至高の冠のほかには苦悩と忍従があるだけだ」

それがまさに皇帝であるというのだ。

「私にあるのはそれだけだ。その僅かな幸せまでなくしたならばどうなる？虐げられてきた者達、友人達を助け功や徳のある者達に幸福を授ける喜びまで奪われては」

「それは」

「そうだろう？せめてそれだけは私に与えてくれ」

彼は友人達に語るのだった。

「それだけは。頼む」

「はい。それでは」

セストは止むを得なく頷いたといった様子でそれに頷くしかなかった。

「陛下の思し召しのままに」

「頼む。それだけはな」

「はい」

「ではここを去ろう」

セストに対して声をかけた。

「また別の為すべきことがある。だからこそな」

「畏まりました。それでは」

「アンニオ」

ティートは去る間に彼にも声をかけた。

「君も私達と共に」

「いえ、私は」

しかし彼はティートのこの申し出は断るのだった。厳かに頭を垂れ、己の心を隠して応えていた。

「ここで少しやるべきことがありますから」

「やるべきことが」

「はい。ですから」

彼は言うのであった。

「是非セストと共に向かい下さい。是非」

「そうか。やるべきことがあるのなら仕方がないな」

「では陛下」

アンニオの心を知っているセストがそつとティートに声をかけた。ティートに気付かれないようにして。

「我々だけで行きましょう」

「そうだな。無理強いてもよくない」

「その通りです。ですから」

「うむ。それではまたな」

「はい」

こうしてティートはセストを連れて神殿の前を後にした。神殿の前の厳かな柱が立ち並ぶ前にアンニオは一人たたずんでいた。その中で呟くのだった。

「仕方ない」

まずはこうだった。

「甘い思いを断ち切るのも運命だ。私は私の恋を諦めよう」

顔を俯けさせて言う。何とか己の心を殺そうとしていた。

「愛情を尊敬に変えて……むっ!？」

何とか己を殺そうとしていたその時だった。淡い赤の服を着た黄金色の髪の毛のまだ少女の幼さが残る金髪の美しい女が彼のところに来たのだった。

「セルヴィリア」

アンニオはその美女の名を呟いた。

「どうして彼女が。それにこんなに美しく」

「アンニオ」

その美女セルヴィリアは彼のところに来て優しい声をかけてきた。

「ここにいらしたのね」

「君……いや貴女は」

「貴女!？私が」

「そうだ」

沈痛な顔を彼女にも見せまいとする。あくまで心だけに収めようとしていた。

「貴女は選ばれたのだから」

「私が選ばれた!？何にでしょうか」

「何にではない」

ここでは言葉を訂正した。

「誰に、です」

「誰に!？話が見えないのですが」

「皇帝に選ばれたのです」

どうしても沈痛なものを隠せなかった。それは無理だった。

「貴女が。私はそのことを貴女に伝える役目を仰せつかっていたのです」

「馬鹿な、そんなことが」

セルヴィリアは最初はその話を信じていないようであった。

第一幕その七

「私が后ですか！？皇帝陛下の」

「その通りです。貴女様こそ」

今にも死にそうな顔でセルヴィリアに語っていた。

「あの方に。そしてローマに相應しい方だということなのです」

「一体何が何なのか」

「お別れです」

ここまで話すといたたまれなくなったのか姿を消そうとするアンニオだった。

「もうこれで。お別れです」

「そんな、そんなことが」

「お別れです」

「駄目です」

やっと事情を飲み込めた。だからといってそれを受け入れることができず必死に彼を止めるのだった。セルヴィリアにとっても受け入れられないことだったから。

「私は。そんなことは」

「僕が最初に愛して」

セルヴィリアの方を振り向きその沈痛な顔で語るのだった。

「最後に愛した人」

「それは私も同じです」

セルヴィリアは今にも泣きそうな顔でアンニオに語る。

「貴方が最初で最後でした」

「僕はその言葉だけでも」

「貴方だけが」

向かい合って言葉を交あわせていた。辛い、苦しい顔で。

「愛しているのに」

「どうしてこの様な運命が」

「想いは消せないのに」

アンニオの言葉だ。

「それなのにどうして」

「貴方の心と私の心が重なり合わない」

セルヴィリアも言う。

「この様な苦しみが私達を襲うなんて」

「惨い運命よ」

「呪わしい世よ」

二人は同時に声をあげた。嘆きの声を。

「どうしてこの様なことが」

「私達を襲うのでしょうか」

二人の嘆きが神殿の前で交あわされる。だがそれも終わらざるを得ずアンニオは去りセルヴィリアは皇帝の宮殿のテートの部屋にいた。ローマの皇帝のものにしては質素でこれといった装飾もなくただ執務の為の机や椅子があるだけの場所でセルヴィリアはテートと会っていたのであった。

まず口を開いたのはセルヴィリアであった。

「陛下」

「何か」

「私はあることをお話する為にここに参りました」

思い詰めた顔でテートに述べるのだった。

「今まさにここに」

「一体何の話を」

「私を陛下のお后にと考えておられるのですね」

「そうだ」

セルヴィリアの問いに対してすぐに答えた。

「君を私の後に迎えたいのだ。それは駄目か」

「ではお話ししましょう」

意を決した顔になった。そこには死への覚悟すらあった。ローマ皇帝に対して今から自分が言うことを考えればそれは当然のことで

あつたからだ。

「私にはその資格はありません」

「それはどうということなのだ」

「私は陛下を愛しています」

まずはこう述べた。慎重に言葉を選んでいた。

「それは事実です」

「ではどうして」

「その愛は皇帝陛下に捧げる愛です」

これが彼女の答えであつた。

「私は既に。ある方を愛しています」

「ある方を！？」

「そうです」

毅然として。今にも死ぬような顔でまた答えた。

「陛下もよく御存知の方をです」

「それは一体」

「アンニオです」

遂に名前を告げた。

「アンニオを。愛しています」

「彼を力」

「私は彼を忘れることができる充分な力を持つてはいません」

続いてこうも述べたのだつた。

第一幕その八

「そして」

「そして？」

「例え皇后になろうともあの方への想いは変わりません」

「どうしてもか」

「罪になることはわかっています」

覚悟についても言及した。

「ですが。全てを正直に申し上げようと思ひ」

「今ここにというわけだったのか」

「その通りです」

覚悟を決めてこくりと頷いた。

「ですから。私は」

「そうか。ならばいい」

「えっ!？」

「いいと言ったのだよ」

驚くセルヴィリアに対して優しい声と目で語っていた。

「君のその心は受け取った」

「では。私は」

「アンニオのところに行くのだ」

そしてあらためてこうも告げた。

「君が愛する者の所へ。行くのだ」

「ですが陛下、私は」

「愛を偽ること」

今度ティートが言ったのはこれであった。

「それこそが最大の罪なのだから」

「愛を偽ることが最大の罪」

「そしてもう一つ最大の罪がある」

彼はまた言った。

「愛を引き離す罪だ」

「それもですか」

「私はこの二つの罪を決して許しはしない」
皇帝の言葉である。

「断じて。だからこそ君はアンニオの所に行くのだ」

「ですが陛下。それでは」

「私は他の者の愛を壊すことはない」

言葉は少し変っていたが心は同じだった。

「決して。だからこそだ」

「陛下……」

「尊い絆はこれからも増えるべきだ」

今度は二人を褒め称える言葉を口に出した。

「君達のように。それでは」

「それでは」

「行くのだ」

またアンニオの所に行くように勧めた。

「私はここにいます。だから」

「宜しいですね」

「私の。皇帝の言葉だ」

だからこそ。絶対の言葉だというのである。

「信じてくれ。だから」

「わかりました。それでは」

心の奥底から熱いものを感じつつティートに対して頭を垂れて述べた。

「陛下、これで」

「二人で永遠に」

「有り難うございます」

セルヴィリアは去りティートは一人になった。すると彼は一人呟くのだった。

「素晴らしい。あの愛こそが素晴らしい」

二人のことを想い眩いていた。

「それがローマの栄光を支える。私の周りにもさらに多くのこの気高き素晴らしい心があらんことを」

これは彼の祈りの言葉であった。

「そうすればローマの栄光は永遠のものとなる。私もまた今の様な重い苦しみを味あうことはないだろうに。欺瞞と隠された真実を見極める為に苦しむことも」

最後にこう祈り場を後にした。この頃ヴィッテリアはセストを側に置き憤怒に震えていた。

「あの娘が后にですか」

「はい」

「何ということ」

怒りに震えながらの言葉だった。セストはそれを聞くだけしかできない。

「恥ずべき恥辱、何故あの娘を」

「ヴィッテリア様」

「それでセスト殿」

怒りに震えるその顔をセストに向けて問うてきた。

「手筈はどうなっていますか」

「まだ何も」

首を横に振ってヴィッテリアに答えた。

「何もしていません」

「何も？よくそれで私の前に」

「貴女様は中止せよと言われたと記憶していますが」

「確かに」

ヴィッテリアもそれは認めた。だが。

第一幕その九

「しかし」

「しかし？」

「知っている筈です。私への新たな恥辱を」

「セルヴィリアのことでしょうか」

「そうです。一度はあの方を愛したというのに」
「ティートのことである。」

「彼は貴方が私の心を得るのを妨げました」

「あの方が」

「そうです。若し彼が生きていれば後悔するでしょう」

「巧に己へのセストの気持ちを利用して彼を煽ってきた。」

「若しです」

「若し」

「私がかまたあの方を愛するようになれば」

「その時は」

「貴方が栄光や野望、愛といったものに動かされないのなら」

「話はさらに続けられる。」

「恋敵が私の愛を奪ったことを見過ごすのなら貴方は誰よりもいく
じなして卑劣な者です」

「何故私をそこまで」

「ヴィツテリアに責められ顔を青くさせるセストだった。」

「私は。貴女を」

「では見せるのです」

「冷然とセストに告げた。」

「貴方のその心を」

「私の心と仰いますか」

「如何にも」

「言葉はさらに冷然としたものになっていくのだった。」

「では早く行くのです」

「ヴィツテリアの言葉は冷たいままだった。

「早く。さあ」

「行きましよう。ですが」

「だがここで。セストは言うのだった。

「ヴィツテリア様」

「何か？」

「私に再び心をお許し下さい」

「思い詰めた顔でヴィツテリアに告げたのだった。

「私は貴女のもっとも気に入るようになり貴女の望まれることをしますので」

「私の望むこと」

「そうです」

「言葉は本気だった。

「今貴女の為に行きます」

「私の為になのですね」

「その通りです」

「思い詰めた言葉が続く。

「その眼差しだけに私は全てを捧げます。ですから」

「そうですか。それでは」

「セストの想いは知っているが聞くだけだった。

「行くのです。何度も言わせないことです」

「では……」

一礼して場を後にした。すると彼と入れ替わりにアンニオとプブリオがヴィツテリアのところに来たのだった。丁度彼女は考えごとをしていた。

「ティート帝よ」

「まずはティートのことを呟いた。

「貴方はお知りになられるでしょう。私を愛さなかったことでどれだけ後悔するのか。天界において。未来永劫後悔することになるで

しよっ」

「ヴェイツテリア様」

「こちらでしたか」

「むっ!?!」

二人の声に顔をそちらに向ける。ここでようやくアンニオとプブリオに気付くのだった。

「貴方達は」

「お急ぎ下さい」

「今すぐに」

「何かありましたか?」

「陛下がお呼びです」

アンニオが彼女に告げた。

「ですから。今すぐに」

「私を。何故」

「陛下は貴女を選ばれたのです」
今度告げたのはプブリオであった。みれば顔には満面の笑みがある。

「おめでとつございます」

「御祝いの言葉とは。一体」

「御存知ないのですか?」

「さて。何を」

まだ彼女は気付かないのだった。怪訝な顔を浮かべたままである。

第一幕その十

「わからないのですが。どうも」

「ですから陛下が選ばれたのです」

「若しかして私をですか？」

「そう、そのまさかです」

アンニオもまた満面に笑みを浮かべていた。

「ですから。早く」

「お急ぎを」

「陛下が私を選ばれた」

ヴィツテリアにとってはまさに青天の霹靂だった。呆然とさえしている。

「何ということでしょうか」

「貴女のお美しさと聡明さ」

「そして血筋」

二人はそれを理由に挙げた。

「陛下はそれ等で選ばれたのです」

「ですから。おめでとうございます」

「有り難き幸せ。しかし」

ここでヴィツテリアは。大変なことを思い出したのであった。

（セスト）

他ならぬ彼のことをであった。自身がその想いを利用して行かせた彼のことを。

（行ってしまった。恐ろしいことになる）

「皇后様」

二人はもう彼女をこう呼んでいた。無論彼女の心中は気付いていない。

（忌まわしい我が怒りよ）

今になって後悔するヴィツテリアだった。

(無分別な激情よ。この二つのせい)

「さあ、お急ぎを」

「幸福の場へ。しかし」

ここでプブリオが思い悩む顔になっているヴィツテリアに気付いた。

「見よ、あの御顔を」

「はい」

気付いていない二人は彼女が大きな喜びにより混乱していると思っ
ているのだった。だからこそ二人で彼女を見て笑みを浮かべてい
るのだ。

「大きな喜びは人を混乱させるな」

「そうですね。あまりにも幸福になり過ぎて」

(不安と苦痛がこんなにも大きく。ここまで恐怖を抱いたことは)
「ではお后様」

気付いていない二人の言葉は相変わらずであった。

「お急ぎを」

「お待ちしていますので」

「わかりました」

何とか応えるヴィツテリアであった。

「お待ち下さい。それでは」

「ええ」

こうしてヴィツテリアは今始めて己の所業に後悔を覚えるのだ
った。だがそれは残念なことに遅きに達したものであった。最早舞
台は動いていたのだから。

カンピドーリオの丘。緑と神殿に飾られたこの丘においてセスト
は激しく身悶えし悩んでいた。

「何という苦しさ。裏切りの罪を犯すことがこんなに苦しいなんて
ティートのことを想い今息を荒くさせていた。

「どうすればいいんだ。陛下を殺めるなぞ」

ここでティートの顔が脳裏に浮かぶ。

「あれだけの偉大で心優しい方を。そして無二の友人を。私は殺めるというのか」

逃げたかった。しかし。

「ヴィツテリア、貴女もいる。私はどうすれば」

もう目の前の神殿は燃えはじめていた。

「手遅れだ。もう」

「セスト」

ここでアンニオが丘にやって来たのだった。彼の部下の兵士達も一緒である。

「武器の音や兵士の声。もう終わりか」

「ここで何をしているのだ？」

「その声はアンニオかい？」

「うん、その通りだ」

彼は明朗に友人に返事を返した。

「僕だが。君は何故ここに」

「僕は……この世で最も恥ずべき男だ」

こう言ってアンニオから顔を離す。

「だから。気にしないでくれ」

「一体何を言っているんだ」

これはアンニオには全くわからない言葉であった。彼と話をしながら首を傾げさえする。

「君は。どうかしたのか」

「僕は」

「アンニオ様」

ここでさらに。セルヴィリアまで来たのだった。

第一幕その十一

「この騒ぎは。何と恐ろしい」

「どうして君がここに？」

「騒ぎを聞いてです」

素直にこうアンニオに答えるのであった。

「それにしてもこの火事は」

「今部下達が収めてくれている」

アンニオの連れて来た兵士達が果敢に動いていた。彼等の水とハンマーが炎を消し建物を壊しこれ以上火が起ることを防いでいた。

「どうやら大事には至らないだろう」

「そうだと宜しいのですが」

「うん、まずは安心だ」

「ですが」

しかしセルヴィリアの顔が曇った。

「この火事は」

「？何か思うところがあるのかい？」

「はい」

思い詰めたような顔をアンニオに向けて答えるのだった。

「これはまさか」

「おかしいというのか」

「そうです。謀略では？」

見抜いていたのだった。彼女は。

「誰かが引き起こしたのかも知れません」

「誰か、か」

プブリオも来ていた。丁度今彼女の話聞いて顔を顰めさせていた。

「それこそが問題だな」

「プブリオ様」

「セルヴィリアさん」

彼はもう政治家の顔になっていた。元老院を預かる男の顔に。

「陰謀ですか」

「私はそう思うのですが」

「ふむ」

彼はセルヴィリアの言葉を聞いて顔をさらに顰めさせた。

「確かに。これは考えてみれば」

「それです」

陰謀と聞いてアンニオも顔色を変えた。その顔で話に入って来たのだ。

「その首謀者は。誰が」

「まさか」

またセルヴィリアの勘が動いた。

「あの方では」

「あの方!？」

「まさか」

それを聞いて二人にもわかったのだった。

「今ここにいる筈がない男」

「だとすると」

「ここにはいないのね……」

丘にもう一人姿を現わした。ヴィツテリアである。狼狽した顔で辺りを見回しつつ姿を現わしたのである。従者の一人も連れてはいない。

「セストは。何処に」

「待て、そしてだ」

プブリオはそのヴィツテリアには気付かずにここでまた不吉なことを思うのだった。

「誰を狙っていたのだ？」

「誰をですか」

「そう、誰をだ」

アンニオに対して告げる。

「誰が誰を。それが問題なのだが」

「探すのですね」

セルヴィリアは暗い顔で二人に問うた。

「それが誰かを」

「探さねばならない」

プブリオの言葉はあくまで政治家としてのものだった。

「必ずな。誰かを」

「幸い私の兵達がいいます」

アンニオはここで部下達のことを出した。

「彼等の力を借しましょう」

「頼めるか」

「是非」

己の正義感に基いての言葉であった。軍人である彼は。

「お任せ下さい。及ばずながら私も」

「期待させてもらう。むっ」

セストはふらふらと彼等のところに戻って来たのだった。目は虚

るなものになっている。

「セスト」

「何かおかしいな」

ヴィツテリアとアンニオはそれぞれ彼を見て言う。だが彼はそれ

には気付かずその虚ろな目で彷徨うように歩きながら言うのだった。

「何処へ隠れるか。だが裏切り者を隠してくれる場所は何処にもな

いのか」

「セスト」

その彼に優しい声をかけてきたのは親友であるアンニオであった。

「どうしたんだい？今の君はおかしいぞ」

「アンニオ」

「落ちて着くんだ」

言葉だけでなく目も顔も優しいものになっている。

「どういう事情かわからないけれど今は」

「アンニオ……」

「さあ、どうしたんだい？君は」

「罪を犯した」

今度は俯いて言うのだった。

「僕はこの上ない大罪を犯してしまったんだ。あの方を」

「あの方を！？」

「まさか」

「言っではいけません」

ヴィツテリアは必死の形相でセストの前に出て彼を止めた。

「それ以上は」

「いえ、僕は己の罪を償います」

今度ばかりは彼もヴィツテリアの言葉には従わなかった。恋よりも良心が勝つたのだろうか。

「この身一つで」

「セスト……」

「言いましょう、皆さんに」

覚悟を決めて顔をあげた。そうして今一同に告げるのだった。

「僕の犯した罪を」

こうして彼は己の罪を告白したのだった。その罪は己だけのものとしながら。今そのことを告白したのであった。ただ一人の罪であるとして。

第二幕その一

第二幕 大いなる慈悲

己の罪を告白したセスト。彼は今取調べを受けていた。それが行われている一室で彼は今は親友であるアンニオと二人で立ちながら話をしていた。

「セスト、一つ言っておこう」

「何をだい？」

「君はあの方を殺してしまったと思っているな」

「違うのかい？」

アンニオの顔を見てそれを問う。

「僕はその罪を犯したのではなかったのかい？」

「あの方は生きておられる」

少し笑ってセストに告げた。

「騒ぎから逃れられ。宮殿に戻っておられる」

「そうだったのか」

「そうだ。僕が嘘をつくかい？」

毅然としてセストに対して述べた言葉だった。

「君に対して。それはどうだい？」

「いや、ない」

親友の言葉を疑うセストではなかった。そして彼のこともよくわかっていた。

「では君はやはり」

「真実を言っているのだよ」

静かに微笑んで彼に述べた。

「あの方は御無事だ」

「そうか。それは何よりだ」

まずはそのことに安心するセストだった。

「だが僕は」

「君の罪のことか」
「これは拭い去ることができない」
俯いての言葉だった。
「あの方を害しようとしたのは紛れもない事実なのだから」
「悔やんでいるんだね？」
「悔やまない筈がない」
言葉にもそれが滲み出ていた。
「祖国を。陛下を裏切ったその罪は」
「君は。あの方が助かったのにまだ己を」
「そういう問題ではない筈だ」
彼は己の罪を何処までも責めていたのだった。今もである。
「僕はある方を殺めようとしたのだから」
「それはそうだが」
「アンニオ」
親友の顔を暗い顔で見据えて告げた。
「あの方を頼む。何があっても」
「何があってもか」
「そうだ。僕はあの方を裏切った」
何処までも己を責めるセストだった。
「だが君はあの方を裏切ることはない。だから」
「いや、駄目だ」
しかしここでアンニオは親友に対してあえて強い言葉をかけた。
「それは駄目だ、僕はそんなことは許さない」
「許さない？僕の罪をだね」
「いや、違う」
それもまた否定するのだった。罪を許さないのではないと。
「君は戻らなければならぬのだ」
「何処に？」
「わかっている筈だ。あの方のところだ」
今までで最も強い言葉をセストに告げた。

「そして己の罪を幾度でも償わなければならぬ」

「僕にその資格はない」

「いや、ある」

言葉が厳格な鞭になっていた。それがセストを撃つ。

「君にはそれだけの忠誠心があるのだから」

「今の僕にはそんなものは」

「僕にはわかる」

なおもセストを撃つ。

「その忠誠心を示す行いを幾度でも見せるのだ。あの方に」

「惨い言葉だ」

「惨いのは承知のうえだ」

言葉が鞭になっているのは彼もわかっていたのだ。それでも言うのだった。

「君の苦悩が辛ければ辛い程あの方への憧れがあるのだから。だからあの方のところへ戻ろう」

「行くか留まるべきか」

セストの心がアンニオの言葉によって遂に揺れ動くことになった。今度はそれに悩まされることになるのだった。

「僕は。もう」

「いえ、駄目です」

だがここで姿を現わしたのは。ヴィツテリアであった。彼はすぐにセストの傍に来て彼に告げるのだった。アンニオは彼女の目には入っていなかった。

第二幕その二

「ヴィツテリア様」

「どうしてここに」

「逃げるのです、セスト」

アンニオを無視してセストを見据えて言うのだった。

「貴方は。逃げなければなりません」

「ヴィツテリア様、何を」

「貴方には関係ないことです」

彼女は止めようとしたアンニオを退けた。その冷然とした気迫で。その気迫は確かに皇帝の血を持つ女のものであった。紛れもなく。

「下がりなさい。宜しいですね」

「いや、僕は」

「下がるのです」

反論は許さなかった。その気迫にアンニオも押されてしまっていた。た。

「私に何かを言えるのは陛下のみ。それはわかっている筈です」

「くっ……」

「わかったのなら下がりなさい。いいですね」

「……」

気迫には逆らえなかった。彼も頭を垂れるしかなかった。

「ではこれで。セスト」

「彼に声をかけてはなりません」

ここでもヴィツテリアに敗れてしまった。

「早く下がりなさい。いいですね」

「わかりました。では」

止むを得なく下がるしかなかった。彼が退いたのを見届けてからヴィツテリアはあらためてセストに対して言うのであった。冷然とした態度はそのままに。

「貴方の命を私の名誉を守る為にです」

「逃げよと」

「そうです」

セストより小柄な筈なのにセストよりも大きく見えた。

「貴方が見つつかれば私の秘密は公になってしまふのですから」

「いえ。それは御安心下さい」

だがここでセストは強い決意の顔でヴィツテリアに述べた。

「私は決して話すことはありません」

「信じよというのですか」

「そうです」

言葉も強い。

「ですから。御安心下さい、私は何があっても」

「私は私以外の誰も信じません」

ヴィツテリアの偽らざる本音であった。

「その私に。貴方を信じよと」

「そうです」

やはり言葉は強いものだった。

「どうか。この僕を」

「果たしてそうなるか」

「そうなるかとは？」

「私は誰も信じません」

このことをまた告げたのだった。

「だからです」

「貴女は……………」

「セスト」

またプブリオが彼に顔を向けてきた。それを見てヴィツテリアはすつとセストから離れた。

「君は陛下を殺めたと思ったな」

「はい」

彼の言葉にこくりと頷いた。

「それが違ったなどと」

「あの方は間違いなく生きておられる」

「しかし僕はあの方を」

「剣で刺したと言いたいのだな」

「そうです」

その感触は他ならぬ自分の腕にあるからこそその返答だった。

「それでどうして」

「その時君は辺りをよく見てはいなかった」

だがプブリオはこのことをセストに告げた。

「よくな」

「！？それでは」

「君はただ宴の場の肉を刺してしまったのだ。あの方ではない」

「間違える筈がありません」

その可能性はすぐに否定するセストだった。

「あの時。僕は」

「煙と喧騒の中で見えなかったのだ」

理由はプブリオの方がよくわかっているのだった。実際は。

「だからだ。わからなかったのだ」

「そうだったのですか」

「そうだ。それでだ」

それを語ったうえでまたセストに告げた。

第二幕その三

「君は召喚されている」

「元老院にですな」

「そうだ、私がいる元老院だ」

彼が元老院議長であるということは変わらないのだ。

「だからだ。私は君を元老院に連れて行くのだ」

「そうですか」

「わかるな、それは」

セストを強い光の目で見据えての言葉だった。

「私は。君を絶対に元老院に連れて行く」

「拒むつもりはありません」

「その心、褒めさせてもらおう」

セストの素直な心をまずは褒めるプブリオだった。

「だが。それだけに」

「私はどうなるのか」

二人のやり取りを聞きながらヴィツテリアは顔を強張らせていた。

「何処に身を隠すべきか。後悔も恐怖も不安も襲い掛かる」

「君の苦渋の涙は見た」

プブリオはセストの心を確かに見ていた。

「だが。それでも元老院の長としての務めからは逃げることはない」

「それもわかっています」

元老院はローマにおいてはかなりの力を持っている。共和制の時代はまさに国家の最高決定機関であった。皇帝が治めるようになってからもその皇帝ですら無視することが出来ない場所だったのだ。様々な問題があるがそれでも議会として機能していたのである。

「ですから。さあ」

「行こうか」

「はい」

二人はその場を後にした。様々な感情に責め苛まれるヴィツテリアだけが残ったが彼女もやがて姿を消した。後には誰も残ってはいなかった。

この時生きていたティートは宮殿の前で民衆の礼賛の声を受けていた。それは熱狂的なものがあつた。

「皇帝陛下万歳！」

「神よ陛下を御護り下さい！」

「私は生きていた」

ティートは彼等のその声を聞きながらまずはそのことに感謝していた。

「だが。私は」

「陛下」

ここでプブリオが彼のもとにやって来た。

「皆集まっております」

「コロシラムにか」

「はい、そうです」

そのことを彼に伝えに来たのである。

「ですから。今すぐに」

「よし。では行こう」

真剣な顔でプブリオの言葉に頷くティートだった。

「元老院は彼の言葉を聞いた筈だ」

「はい」

ティートの言葉に対して頷く。

「おそらくは」

「同時に彼の心も知った筈だ」

己を殺そうとした者だったがそれでも彼を信じていたのだった。

「彼は無実だ」

「私もそう思います」

これはプブリオも信じていることだった。

「彼はその様なことをする者ではありません。きっと黒幕が」

「それが問題だ」

伊達に皇帝になっているわけではなかった。それだけのことを見抜く目もまた備えているティートだった。彼は政治家として確かな目を持っているのだ。

「だがまずは彼を」

「では私も」

プブリオも同行するつもりであった。

「心配です。急がなければ」

「その通りだ。では」

「ただ。問題は」

ここでプブリオの顔が曇る。

「元老院の者達がどう思うかです」

「元老院がか」

「そうです」

元老院は議会だ。だから様々な者がいるのだ。それがよい部分であるが同時に弊害もないわけではない。議会という組織の問題点はこの時代からあったのだ。

「彼等がどう思うかです」

「彼等がセストを疑うというのか」

これはティートにとっては信じられないことだった。

第二幕その四

「まさか。彼の心は」

「御言葉ですが陛下」

ここでプブリオは暗くそれでいて強張った顔でティートに告げた。

「誰もが貴方の心を持っているわけではないのです」

「私の心を持っていないというのか」

「百人いれば百人の心があります」

ローマにおいてもこのことは同じであるのだ。

「忠誠に欠けるということを一度も知らぬ方は裏切りに気付くのが遅いのです」

「何っ！？それはどういう意味だ」

「真実にして名譽に満ちた心には不思議なことではないのです」

「彼等がセストを疑うというのか」

「そうです」

怪訝な顔になったティートにまた述べる。

「他の全ての心を不忠でなど有り得ないと信じたとしても」

「セストは邪悪な者ではない」

否定するティートの声が強くなる。

「私は。わかっているのだ」

「陛下」

ここで今度はアンニオがやって来た。すぐにティートの前に片膝をついて顔をあげてきた。

「御願いがあり参りました」

「セストのことだな」

「その通りです」

毅然とした顔で彼に答えた。

「ですから。どうかそのお慈悲を」

「慈悲をか」

「なりませんか？」

「それは私としてもだ」

そうしたいと言おうとしていた。しかし二人が話しているその間にプブリオは場に来た一人の兵士から一枚の紙片を受け取っていた。そこに書いてあるものを見て顔を顰めさせた。そのうえで暗い顔をしてティートのところに来て彼に対して沈痛な声で告げたのだった。

「陛下、残念なことをお伝えしなければなりません」

「残念なこと？」

「セストのことです」

セストの名前を聞いてティートとアンニオの顔が強張った。

「まさか」

「それはまさか」

「彼は全てを認めました」

そのことをティートに対して告げたのだった。

「全てを。認めました」

「まさか。それは」

「そうです。その結果元老院は決定しました」

彼はさらに言葉を続ける。

「セストを猛獣刑に処すと」

「猛獣刑だ！？」

「そうです」

このことをまた告げるプブリオだった。

「元老院の判決は下りました。コロシウムで行われる処刑に彼も引き出されるのです」

「コロシウムでか」

コロシウムはこの時代はキリスト教徒や死刑囚を猛獣の餌にする見世物が行われることがあったのだ。キリスト教徒へのこの処刑はカリギュラが考え出したと言われている。

「そうです。後は」

「私の署名だな」

死刑判決には皇帝の署名が必要なのである。

「後は」

「既に元老院は決定しました」

プブリオもこの言葉は言いたくはないがそれでもであった。元老院の決定がどれだけ重要なものであるのかは彼が最もわかっていることだった。

「ですから後は」

「陛下っ！」

アンニオの声が血がほとぼしり出るようなものになっていた。

「どうかここは」

「私は」

「もうコロシウムには市民達が集まっています」

またプブリオが告げる。

「最早」

「私の署名だけか」

「確かにセストは罪を犯しました」

元老院の判決は絶対だ。このことはアンニオもわかっている。皇帝ですら逆らえないことが多々あるのが元老院の決定なのだということ。

「貴方様を裏切りました。ですが陛下の御心で」

「私のか」

「私の妻になるべき人の兄です」

今度は血縁も出した。

「ですから。何としても」

「セストは。後は私の署名だけでか」

「御願いです！」

アンニオの目からは嘆願の涙が流れていた。

第二幕その五

「どうか。ここはお慈悲を」

「陛下、署名を」

「プブリオも告げる。」

「後は陛下の御署名だけです」

「二人共。頼みがある」

だがここでセストは静かな声で二人に対して言うのだった。

「私を一人にしておいてくれないか」

「一人にですか」

「そうだ」

また二人に対して告げる。

「一人にだ。ここは」

「アンニオ」

プブリオがティートの言葉を受けアンニオに声をかけてきた。

「ここは去ろう」

「去るといふのか」

「そうだ」

言葉が少し強いものになっていた。

「今は陛下を御一人にしよう」

「しかし」

「警護なら問題はない」

これはプブリオが保障するのだった。

「まずはこの部屋は調べたな」

「うむ」

「そして宮殿の中も外も既に兵士達で固めている」

「これもまた言う。」

「だからだ。警護は万全だ」

「それはそうだが」

「それにだ」

これが本題であった。

「今陛下は悩んでおられる。だからこそ」

「御一人にというのだな」

「わかったな。それではだ」

もう一度彼を諭す。

「ここは部屋を去ろう。いいな」

「わかった」

考えた末にプブリオの言葉に頷くアンニオであった。

「ではそうしよう。僕も」

「わかつてくれたか。では陛下」

アンニオをわからせたうえでまたティートに顔を向けてきた。

「私達はこれで」

「済まない。それではな」

「はい、ごゆっくりと」

「陛下」

アンニオは部屋をプブリオと去りつつ彼に声をかけた。

「何だ」

「信じております」

「済まない」

こうしてティートは一人になった。一人になった彼はまずは大きく天を仰いだ。そのうえで苦渋に満ちた声をその喉から絞り出すのであった。

「何という戦慄、何という裏切り」

まずはこう言った。

「彼が私を殺そうとしていた。親友である彼が」

言うまでもなくセストのことである。

「後は私の署名のみだ。しかし」

ここで彼は元老院の判決文を見るのだった。プブリオが彼に差し出した。そこにははっきりとセストに対する判決と処刑が書かれて

いた。

「極悪人は死を」

ローマにおいてもこれは変わらない。

「親友を裏切った者には死だ。しかしだ」

ここで彼の中で二つの心がせめぎあつた。

「このままでいいのか。彼の話の話を聞かずに」

セストのことを思つたのだった。

「それは。どうなのか。いや」

元老院のことを思い出した。

「元老院が聞いた。そのうえで判決だ。ならば問題はない筈だ」

そういうことになるのだ。ローマにおいて元老院は時として皇帝や軍部ですら凌ぐ力を見せるからだ。あのネロも元老院と対立し失脚している。

「しかし。秘密があるのではないのか」

彼が次に思つたのはこのことだった。

「彼には。私に隠さなければならぬ秘密が。それが若しあつたら」

そのことも考える。

「そうだ」

ここで彼は考えた。すぐに呼び鈴を鳴らす。すると一人の将校が入って来た。

第二幕その六

「何でしょうか」

「頼みがある」

「まずはこう彼に告げた。」

「いいか、セストを」

「セスト様を」

「私のところへよこすように。いいな」

「畏まりました」

「将校は彼のその言葉に頷いて答える。」

「それではそのように」

「頼むぞ。ではな」

「はい」

「将校は一礼してから退室しまたティート一人になった。その顔は先程と比べればまだ幾分か明るくはつきりとしたものになってはいた。」

「皇帝になるということは不幸だ。他の者が許されることが許されない」

「それだけ窮屈で制約があるということだ。」

「宮殿にいても命は保障されない。穏やかな眠りもない」

「むしろ寝られる時がないと言っている。」

「常に誰かを見ていなければならず見られる。命も何時消えるかわからないのだからな。思えば何と苦しく不安な玉座なのだろうか」

「皇帝の座のことを考え俯く。するとここで先程の将校に案内されたセストが部屋に來たのだった。彼はティートの姿を認めまずは驚きの声をあげた。」

「陛下、ここで御会いするとは」

「セストか」

「ここで彼等は互いの顔を見た。そしてそれぞれの顔を見て思うの」

だった。

「何と恐ろしい御顔になっておられるのか」

「何と俯いているのか」

互いに思う。

「恐ろしい。僕は」

「罪の為か」

「やはりな」

ここにはプブリオも来ていた。彼はティートの顔を見て察したのであった。

「陛下は今心の中で葛藤されている。だがまだセストを信じておられるな」

「セストよ」

「はい」

既に将校は退室し部屋にいるのは気心の知れた三人だ。ここでティートはセストに対して声をかけたのであった。セストもそれに応える。

「こちらへ来てくれ」

「恐ろしい声だ」

今ではこう思つたのだった。

「この声は」

「来てくれ」

またティートは言うのだった。

「こちらへ」

「苦しい」

行きたくとも行けないセストだった。脚が震えて動かないのだ。

「ここにいるのは三人だけだ」

「ええ」

「プブリオのことは気にしなくていい」

彼についても言及するティートであった。

「信用できる人物だからな。君もそれは知っているな」

「ええ、それは」

プブリオもまたセストの親友だ。だからその心はよく知っていたのであった。だから今のティートの言葉に頷くことができたのだ。た。

「よく存じております」

「それではだ」

それを確かめたうえでまたセストに声をかける。

「話してくれ、君の心を」

「僕の心をですか」

「そう、君の心を」

セストの目を見て語っていた。

「言ってくれ、この私に」

「陛下にですか」

「私のことも知っている筈だ」

暗に友情を出した。

「だからこそ。今ここで」

「それは」

（陛下か、それともヴィツテリア様か）

セストの心もまた葛藤していたのだった。顔には汗でしか出ていないが。

（ヴィツテリア様のことは言えない。どうすれば）

「言ってくれ」

またティートは言ってきた。

「私に」

「元老院の判決の通りです」

セストはヴィツテリアを選んだ。沈痛な顔の裏で。

「私が申し上げるのはそれだけです」

「言うことはないというのだな」

「そうです」

ティートの問いに対しても答えた。

第二幕その七

「ですから。もう」

「言わないのか」

「ですから元老院で申し上げた通りです」

やはり言わない。

「これ以上は」

「わかった。それではだ」

これ以上の話は無理だとわかりティートはまた呼び鈴を鳴らした。すると今度は数人の兵士達が部屋に入って来たのであった。

「セストを連れて行け」

「陛下、宜しいですね」

「仕方ない」

プブリオに対しても答える。

「言わないのだからな」

「陛下」

兵士達に囲まれたセストはここで。ティートに顔を向けて言ってきたのであった。

「私達はかつては熱い友情を持っていました」

「うむ」

これはティートも認めた。

「その通りだ」

「だからこそ貴方のお怒りはわかります。その悲しみも」

「むっ!?!」

ここでプブリオはあることに気付いた。

「今の言葉は。若しや」

「慈悲は求めません」

だがプブリオが考える前にセストはまた口を開いた。

「それがさらに貴方の怒りを掻き立てるでしょう。それは私を悲し

「みのうちに死なせます」

「どうやら彼は」

「私は絶望のうちに死に向かいます」

セストはさらに言う。プブリオの目をよそに。

「死ぬことは恐れませんが、ですが貴方を裏切ったというこの思いが」

これだけ言っただけ姿を消した。後にはティートとプブリオが残る。

ここでプブリオはティートに対して告げたのだった。

「陛下、若しやです」

「どうした？」

「セストは主犯ではないのかも知れません」

探る顔でティートに告げた。

「若しかして」

「若しかしてか」

「そうです」

「だが。そうだとしても」

ティートの顔が暗い。その暗い顔で語る。

「背信だ。私は復讐の心を己の中に感じる」

「復讐をですか」

「この様な忌まわしい心は消え去れ」

そうした考えは彼の嫌うところであった。

「セストは罪を犯した。確かに死ぬべきだ」

「はい」

「しかしだ」

彼は迷い思い詰めた顔をプブリオに見せていた。

「私は。やはり赦すべきではないのか」

「セストをですか」

「そうだ。私の心を占める大きなものが私に語っている」

それが何であるのか。ティートはもうわかっていた。

「やはりそれに従おう。だから」

あの判決文を手取る。そして。

一気に引き裂いてしまった。これで終わりだった。

「これでいい」

「陛下、それでは」

「主犯あるうとなくともだ」

もうそれも問題ないというのだ。

「彼には生きていてもらう。例え不実であつても」

「不実であつても」

「これにより私が世から神々から批判されようとも」

覚悟は出来ているということであつた。

「私は慈悲を取る。今」

「左様ですか」

「そうだ。その証がこれだ」

引き裂いた文書をプリンオにも見せる。もうそれは床に散りゴミとなつていた。

「こういうことだ」

「では」

「行こう」

もうそこには迷いはなかった。

第二幕その八

「帝位には厳しい心が必要か」

「帝位にはですか」

「そうだ。どう思うか」

真剣な顔でプブリオに問うてきた。

「これについては」

「それは」

「私は今思う」

その顔のまままた語る。

「神々はそれにより私から帝位を取り上げるか別の心を与えて下さるのかと」

「どちらかですか」

「そしてだ」

さらに言う。

「帝権への忠誠を愛によって確かなものにするものでなければならぬ」

「それはその通りです」

「恐怖がもたらす忠誠であってはならない」

これは彼が以前から持っている考えであった。

「何があるうともな」

「ではその御心を今」

「そうだ、見せよう」

言葉と共に顔をあげた。

「私の心をな。皆に。そして」

「セストにですね」

「うむ。それではな」

「ええ」

こうして二人は場を後にした。この時ヴィツテリアはアンニオ、

そしてセルヴィリアと会っていた。二人はヴィツテリアに対して懇願していた。

「ヴィツテリア様、御願いがあります」

「どうか」

「セストのことですね」

「そうです」

「その通りです」

ヴィツテリアに対して今にも泣きそうな顔で頷く二人であった。

「御願いです、どうか」

「彼を救う為に」

「私がそれについて何ができるか」

だがここでヴィツテリアは顔を曇らせるだけであった。その顔を見て二人はさらに顔を暗くさせるのであった。

「それは」

「やはり」

「やはり？」

「貴女様は陛下の御后様です」

アンニオが言うのはこのことであつた。

「ですから。貴女様の御言葉で彼は救われるのです」

「わたしはまだそうではありません」

こう言つて逃げようとするヴィツテリアであつた。

「まだ。それは」

「ですがもう決まっています」

「そうです」

だがそれでも二人はさすが。彼等とて必死だ。

「それは間も無く」

「ですから」

（それでは）

今の二人の言葉を聞いてヴィツテリアはあることに気付いたのであつた。それは他ならぬセストのことであつた。

(彼は話さなかった。私のことを)

「アンニオ」

「はい」

無意識のうちに言葉が出た。

「セルヴィリア」

「はい」

そしてまた。無意識のうちの言葉であった。

「行きなさい」

「行けとは」

(何処に行くというの?)

言った本人がそれを把握していなかったのであった。言った側から内心で戸惑いを覚える。

(私は。何処に)

「私は後から行きます」

(また)

だが。またしても言葉が出てしまった。

(どうして。こんな)

「ヴィツテリア様」

セルヴィリアは今の彼女の言葉に涙し。そして彼女に対して言うてきた。

「涙する以外の何事も彼の為にするのならそれは何にもなりません」

「確かに」

「貴女様が感じておられるその憐れみと冷酷さは同じものです。ですから」

「動いて欲しいのですね」

「その通りです」

「ですから」

二人はまたヴィツテリアに懇願する。

第二幕その九

「どうかセストの為に」

「御願いします」

「わかっています」

またしても無意識からの言葉だったが今度は断言であった。

「ですから先にお行きなさい。いいですね」

「信じてもいいのですね」

「私とて皇室の血を引くもの」

彼女のその唯ならぬ誇りの拠り所であり絶対のものだ。

「これだけ言えば。おわかりですね」

「では。御願いします」

「どうか」

「ですから先に行くのです」

このことをまた二人に告げた。

「宜しいですね」

「それでは。その御言葉のままに」

「私達は」

「何度も言うことは好きではありません」

否定するつもりはないということであった。

「宜しいですね」

「有り難うございます」

セルヴィリアが涙して頭を垂れた。

「ではその御心を受け取らせて頂きます」

「私もです」

そしてアンニオもそれは同じであった。

「どうか。御願いします」

「ええ。それでは」

二人は先に行った。一人になったヴィッテリアは。まずは強い決

意の顔で呟くのだった。

「いよいよね」

その顔で言う。

「私の心の強さを試す時が。十分な勇気を見せる時よ」

その勇気を見せる相手もわかっていた。

「自分の命よりも私を選んだセストの為に。醜い私の為に全てを捨てようという彼の為に。今その勇気を見せなければならぬ」

そう決意するのだった。

「正義に欠ける私に真心を捧げている。その彼を犠牲にして后となるうとも私は自分を許せない。それならば後の座なぞいらぬ」

そしてさらに言う。

「花で愛の鎖を作る婚姻の神の姿ではなく太い処罰の鎖を持つ冥府の神が見える。しかしこの不幸も私が招いたこと」

だからいいというのだった。

「さようなら、私の野望」

もう野望は捨て去った。

「今から私は勇気で己の罪を償いに行く。今から」

最後にこう言い残して姿を消した。夕刻になるとコロシウムではもう観客達が詰めていた。そこにはティートもいてアンニオやプブリオ、セルヴィリアを伴ってコロシウムの皇帝の席から協議の場、今は処刑の場にいるセストに対して言葉をかけていたのであった。

「セストよ」

「はい」

まずは彼の名前を言うのであった。セストもそれに応える。

「わかっていると思う。何故ここに自分がいるのか」

「無論」

毅然としてティートの言葉に頷く。

「その通りです」

「罪は償われるべきもの」

ティートは厳かに彼に告げる。

「とりわけローマを騒がせた罪は重いとっておこう」

「仰る通りです」

「アンニオ」

セルヴィリアは今の二人のやり取りで顔を暗くさせアンニオに顔を向けた。

「このままじゃ」

「信じよう」

不安に苛まれる彼女を慰めるのであった。

「あの方を。今は」

「そうね。それしかないのね」

「絶対に来られる」

彼はヴィツテリアの言葉を信じていた。その誇りから出た言葉を。

「だから。待とう」

「ええ、それじゃあ」

そしてここで。その彼女が来たのだった。

「来られた」

「遂に」

「陛下」

ヴィツテリアは今にも死にそうな青ざめた顔でティートの前に姿を現わした。その顔はまさに冥府の女王ペルセポネーのものであった。

「ヴィツテリア。どうしてここに」

「お話したいことがあります」

「私にか」

「そうです」

その死にそうな声でティートに語る。

第二幕その十

「彼ですが」

「セストか」

「そうです」

セストに顔を向けて語る。セストは意識してヴィツテリアから視線を逸らしていた。

「彼は無実です」

「無実だというのか」

「その通りです」

語るその顔がさらに青ざめる。最早死者の顔そのものであった。

「真の罪人は他にいます」

「他にか」

「そう、私は知っているのです」

何とか言葉を出した。喉が潰れそうになったが。

「その邪悪な陰謀の張本人を。私は知っています」

「誰だそれは」

「そうだ、誰だ」

「セスト様が犯人でないとすると」

ヴィツテリアの今の言葉を聞いてコロシウムにいる市民たちも騒ぎ出した。最早処刑も協議もそれどころではなくなってしまうていた。

「誰なのだ？」

「それは」

「そしてそれは誰だ」

ティートはまたヴィツテリアに問うた。

「そなたが知っているというその張本人は」

「信じて下さいますね」

まずは念押しをしてきた。

「私の言葉を」

「無論」

毅然として返した言葉であった。

「ローマ第一の市民の名にかけて」

プリンキケプスということだ。ローマ皇帝はまずはローマの民主制を守らなくてはならないとされている。だから元老院もかなりの力を持っているのである。

「それを誓おう」

「わかりました。それでは」

ここまで聞いたうえで覚悟を見せたのだった。己の揺るぎない覚悟を。それは。

「その張本人ですが」

「それは誰だ？」

「私なのです」

告白する瞬間は顔が強張っていた。

「この私なのです」

「何っ!？」

「何だと！」

皆それを聞き一斉に驚きの声をあげたのだった。まさかと思わずにはいられなかった。

「ヴィツテリア様がか！」

「そんな！」

「嘘ではないな」

「先程申し上げた通りです」

そこにある強い決意は不動であった。

「貴方様に忠誠と友情を誰よりも持っていたセストを唆し」

「私を殺させようとしたのだな」

「彼の私への想いを利用しました」

「このことも告白したのだった。」

「私は。自分の為に」

「何故その様なことを」

「私が后になれないと思つたからです」

これについてはティートも心当たりがあつた。確かにこれまで皇
后を選ぶにあたって二転三転していたからだ。だがそれがヴィツテ
リアの邪心を起こしたとは気付いていなかったのだ。

彼女はさらに言う。

「それ故です。それで怨みの心を抱き」

「それでか」

「その通りです。全ては私が」

「私はセストを赦すことを決めていた」

ティートは俯いて述べたのだった。

「だがまた一人罪を犯した者が出て来た。これは私に冷酷になれと
神々が言われているのか」

「こつもさえ思つた。」

「まさか。いや」

だがここで彼はまた決意したのであつた。

「私は常に決意している。ならば」

「では陛下」

「どうされるのですか？」

ここで誰もがセストに対して問う。

「赦されるのですか？」

「それとも」

「言つた筈だ」

ティートの言葉にはもう迷いはなかつた。

「先程な。それは」

「ではやはりここは」

「赦す」

一言であつた。

「私のこの心が不変であることを。今ここで宣言しよう」

「陛下……………」

コロシラムを歓声が包み込む。皇帝を讃える歓声だ。だがその中でセストは。半ば呆然としながらティートに対して言うのであった。

「貴方様は私を許して下さいました」

「うむ」

セストのその言葉に対して頷いてみせる。

「私はもう決めていたのだから。それに従ったまでだ」

「ですが私の心は私を許しません」

これはセストの良心故の言葉だった。

「心は過ちに対して泣いていくことでしよう。この記憶のある限り」

「真実の後悔はそなたがそれを為すならばより大きな価値がある」

これはティートがセストにかける言葉であった。

「少しも揺るがぬ忠誠によって」

「永遠の慈愛よ讃えられよ」

「この御方によりローマに幸福を得させて下さい」

「若し私が間違っているならば」

人々の讃える声の中ティートは一人呟いていた。

「全ての罪は私が背負おう。その時には」

その心で以つての全ての慈悲であった。ティートはその覚悟によりセストもヴィツテリアも許したのだった。それが正しいのかをまだ迷いつつも。だがそれを変えるつもりはなかった。己が正しかったと信じたかったからだ。この慈愛が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7508i/>

皇帝ティートの慈悲

2011年4月28日00時57分発行